

P-014

第1子乳児をもつ母親の育児ストレスと関連要因:直近10年のテキストマイニングによるキーワード抽出と傾向分析

伊草 綾香¹⁾、関 美雪¹⁾、延原 弘章²⁾¹⁾埼玉県立大学 保健医療福祉学部 看護学科、²⁾埼玉県立大学 保健医療福祉学部 健康開発学科

【はじめに】現代の母親は、核家族化や子どもとの関わり不足が指摘され、特に初産婦である「第1子乳児を持つ母親」は、育児ストレスや否定的な感情が増強しやすく、産後うつ病の発症リスクも高い。育児ストレスは母親のみならず、子どもの心身や発達に悪影響を及ぼし、児童虐待のリスクを高めるため、様々な施策が展開されている一方、依然として大きな課題である。

【目的】「第1子乳児を持つ母親」の育児ストレスに関連するキーワードと傾向を文献より明らかにし、育児ストレス対策の新たなアプローチ方法を検討する。

【方法】発刊年を直近10年としCINAHL Plus with Full Text、CiNii Research、医学中央雑誌、J-stage、メディカルオンライン、PubMedを用いて母親 AND (初めて OR 初産 OR 第1子) AND 育児 AND (ストレス OR 不安) で検索した。不妊治療・栄養法・多胎児・医療的ケア児・養育が主なテーマである文献を除いた37本を対象としKHCoderによるテキストマイニングを行い、可視化した。

【結果】延べ単語数3,967語が抽出された。抽出語より共起ネットワークを作成した結果、9グループに分類された。さらに対応分析の結果、座標軸の原点付近や第1象限には育児技術に関連する母親の「家庭人(母)としての側面」が、またy軸に沿って第1・2象限には「家庭人(妻)としての側面」がプロットされた。第3象限には「社会人としての側面」が、またxy軸の値が負になるにつれ「個人としての側面」がプロットされた。KWICコンコダンスより単語の意味内容を確認した結果、「母親が求める育児とパートナーが実践する手段的、情緒的サポートが不十分で合致しておらず、夫婦関係満足度が下がる」「育児以外での自分の価値」「一人の女性としてのアイデンティティー」があった。

【考察】現行の育児施策において育児相談や育児休業制度といった母親の「家庭人・社会人としての側面」に対するアプローチが多く展開されている一方、母親自身のメンタル面に対するアプローチは未だ充分ではなく、母親の「個人としての側面」にアプローチしていく必要性が示唆された。

P-015

子どもの年齢別にみた母親の育児ストレスの状況とコーピング特性の比較—生後3～4か月,10か月,1歳6か月,3歳6か月の4期に焦点をあてて—

宮崎つた子¹⁾、本田 育美²⁾¹⁾三重県立看護大学 看護学部、²⁾名古屋大学 大学院 医学系研究科 総合保健学専攻

【背景】近年、児童虐待報告件数は増加傾向にあり、その背景に育児ストレス等が問題視されている。行政や地域では、母子保健事業等の重要課題として様々な支援活動が行われている。育児ストレスは児の成長発達に伴い内容が変化するといわれているが、乳児の頃から4歳近くになるまでの子どもの年齢別による母親の育児ストレスの状況やコーピング特性の比較に関する報告は少ない。

【目的】生後3～4か月,10か月,1歳6か月,3歳6か月の時期の子どもを持つ母親の育児ストレスの状況とコーピング特性の違いを明らかにする。

【方法】2021年2月～2024年3月に東海地域A地方小都市において、設定した4時期に該当する年齢の子どもをもつ母親を対象に、自記式質問紙調査を実施した。調査内容は基本属性、育児ストレスインデックス(PSI)コーピング特性簡易評価尺度(BSCP)等を用いた。時期別に、Kruskal-Wallis検定、多重比較にて分析した。有意水準は5%未満とした。本研究は三重県立看護大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した(No.170402, 23064)。

【結果および考察】対象者は3～4か月の母親473名、10か月の母親352名、1歳6か月の母親326名、3歳6か月の母親3254名であった。母親の年代は、どの時期も30歳代が一番多かった。また初産婦は約36～40%であった。4時点において、PSIの総得点、子ども側面の得点、親の側面の得点に有意差があり、子どもの年齢が高くなるにしたがってストレス得点は上昇していた。多重比較の結果、総得点と子ども側面の得点では、3～4か月と1歳6か月、3～4か月と3歳6か月、10か月と3歳6か月の時期の間で有意差があった。親の側面の得点では、3～4か月と3歳6か月の時期の間で有意差が認められた。さらに、PSI下位尺度では、子の側面の「親を喜ばせる反応が少ない」、親の側面の「親としても有能さ」と「退院後の気落ち」の項目には時期の間で差はなかった。PSI得点の結果からは、子どもが生後3～4か月から3歳6か月までの年齢が上がるほど母親の育児ストレス状態に影響を及ぼしていると考えられる。各時期のBSCPの得点比較では、下位尺度6項目の全てで有意差がみられなかった。同期間の子どもが生後3～4か月,10か月,1歳6か月,3歳6か月の時期別の母親自身のストレスコーピング特性は、育児中の子どもの年齢や成長発達による変化は少なく影響は受けにくいと推察される。